

2025年12月に、大沢の整備に携わる団体や町内会、森林サポートレンジャーあきる野などの協力でドングリ（コナラ）の2回目の苗づくりを始めました。この活動は、カシノナガキクイムシによる「ナラ枯れ病」でコナラ林のドングリの老齢木の枯損が広がっていること、さらに地球温暖化の要因とされる「CO2」（二酸化炭素）に対して、樹木はC（炭素）を取り込み、O2（酸素）を放出し、炭素固定（樹木に取り込む）をすることで、少しでも地球温暖化対策になればと、大きな期待を込めて植樹するものです。大沢ではすでに20本のコナラが育っており、それ以外にもイロハモミジ、ヤマザクラ、ケヤキ、エノキが育っています。これらの樹木によって、炭素固定が進んでいます。1本の樹木が育ち、樹木の重量が3トンになれば1トンの炭素を固定すると言われていています。この時の樹木の重量は根も含むため、材木として見る樹木より見た目が小さくても3トンの重量はあると考えます。100本の木が育ち、ある程度大きくなれば100トンの炭素を固定したことになります。

さらに大きなポイントになるのが武蔵野台地から連なる落葉広葉樹林の里山で重要な樹種であるコナラがナラ枯れにより減少していることです。「コナラ林」を再生することにより、里山風土を守ることも大きな意味があります。昭和40年代に急速に進んだ燃料革命で薪炭としての利用が激減し、落ち葉を集めて腐葉土を肥料として利用する農業も化学肥料の普及で需要が激減して、コナラ林（里山）の管理が放棄されてきました。このような理由で、適正な管理（萌芽更新など）が滞り、里山には大径木のコナラが育ち、そのような大径木のコナラがカシノナガキクイムシを大量発生させて「ナラ枯れ」による枯損が広がった理由とされています。若いコナラ林はカシノナガキクイムシの攻撃を受けても枯損することは少ないため、里山の景観や風土が維持されます。

生育が旺盛な若いコナラは、傷がつくと沢山の樹液を出し、夏の昆虫類の蜜源としても機能しその実は鳥類に採食されるなど多くの生き物が利用する森ができます。



↑ドングリを集める

1本のコナラからドングリを拾うのではなく、散在するコナラからドングリを集めるために林内を歩き回ります。

これは色々な遺伝子を持ったドングリを集めることにより、コナラの多様性を維持するために行っています。



↑ドングリの選別

参加者に集めてもらったドングリを選別します。本来は塩水選が良いのですが、塩水処理の問題もあり、真水で選別しました。

軽く充実していないドングリは水に浮くので排除します。

この時は1/3ほどのドングリが浮き上がりました。



←集めたドングリの播種

水を切り、ドングリを蒔いて浅く土をかぶせます。ドングリは土をかぶせなくても発芽しますがドングリが見えているとカケスなどが持っていくこともあります。播種し、土をかぶせた後は足で土を踏み固めます。

播種は小学生の親子にお願いしました。この子が大人になるころには立派な森になっていることを願っています。周りの柵は、ニホンジカやイノシシの採食や掘り返しからドングリや育ち始めた苗木を保護するために設置しています。

今ある区画の管理と並行して、今後も少しずつ苗を増やしていければと考えています。

枯れた苗畑への補植→

2024年11月に植樹を行いました、枯れてしまった箇所もあります。そのような場所に補植をしました。

樹種はコナラではなく「ナラガシワ」というドングリの仲間です。市内では野生下のナラガシワは絶滅したと聞いています。

図鑑などによるとけいはんりん溪畔林(溪流沿いの森林)を形成するとされている「ナラガシワ」ですが、同じような環境を好むとされる「ハンノキ」などを見てみると、必ずしも水辺ではなく、乾燥した岩稜帯でも生育していることから、ナラガシワも同様の生育力を持っていると考えて、あえて斜面に植栽しました。

今後、世代を繋いでくれることを願い、菅生地区の原野での生育を試みます。



←作成した苗畑

この場所は、イノシシやニホンジカの楽園で、掘り返しにより柵の支柱が倒れたり、防護ネットをシカが角に絡ませてネットを支柱ごと持ち去ることもありました。

今回は、イノシシへの対策に各ネット(柵)の地際に木酢液をスプレーしてもらいました。

木酢液によるものか、人が集まったことで避けるようになったのか、イノシシの掘り起こしはなくなり、効果があったと思っています。

ですが、2か月たった現在では、少し効果が減少してきたとも感じています。

傷んだり支柱が緩くなった柵の修理をして、今回の整備作業を終了しました。



市民の協力のもと100本の樹木が大きく育ち、100トンのCO2(二酸化炭素)を固定する森ができることを祈っています。